



T 西日本新闻 文化版 1988 年 9 月 26 日~10 月 8 日

闘争心かきたてられ

「九州派并非过往云烟，它正鲜活地存在于我当下的创作姿态中。」作为九州派创始核心成员的石桥泰幸，在铺着未干底漆的毛毡、面积仅六叠的画室里如是说。

「在日韩现代绘画展上，我既与韩国艺术家深化交流，又与他们展开切磋；同时持续挑战新材料。此外，樱井孝身先生在法国、菊畑茂久马君在福冈市、越智修等人在福冈市奋力耕耘。正因始终视他们为竞争对手，我才毅然辞去公司工作，甘愿贫困也要选择纯粹的绘画之路。即便九州派已解散，他们的存在至今仍不断点燃我的斗志。」

平日沉静的他，谈及九州派时便显露锋芒。不同于其他成员，他谈论时滴酒不沾，更显气势逼人。

日韩现代美术展

石桥在九州派诞生之前，即 1952 年刚高中毕业时，便连续三年入选二科展。那是个“入选”远比如今珍贵的年代。他师从久留米市已故的伊东静尾——这位二科西人社的主理人，曾被寄予厚望。他舍弃精英世界选择九州派，是因为“追求入选就必须压抑表现力。九州派既无束缚，又充满彼此严苛碰撞作品的真刀真枪较量之势。”

九州派的历史就是一场场战斗的延续。对手不仅是艺术、权力、中央，甚至包括同伴。作品间飞舞着尖锐的批评。“当战斗消失时，绘画便会衰败”——对坚信此理的石桥而言，这样的九州派反而成了最舒适的归宿。

而今年迎来第八届的日韩现代美术展，正是这种精神的延续。他与九州派时代的伙伴山内重太郎（福冈市）自首届便共同参展，坦言：“这是探索有别于西方的东方独特空间的舞台，但韩国人将全世界目光聚焦于此的魄力令人震撼。我们必须超越他们。”

意识到了竞争对手的存在

1968 年，正值九州派解体之际，他辞去了西日本铁道的工作。“与其边工作边半吊子地画画，不如作为画家活下去。”当时他三十八岁，肩上扛着两个年幼的孩子。空前的绘画热潮还要很久才会到来，地方抽象作家的作品根本卖不出去。面对反对辞职的妻子，他竭力劝说：“男人一旦决定的事，就算穷困潦倒也要养活你们。”

虽声称“九州派时期每次办展都花光薪水，对贫困早有心理准备”，但若非心志坚定，岂能舍弃大企业职位？促使他下定决心的，或许正是竞争对手的存在。彼时菊畑正以《轮盘系列》引发中央美术界瞩目，樱井与越智则远赴美国。受托编纂旧金山第三届九州展手册的石桥若心生焦虑，倒也不足为奇。毕竟三人皆将全部赌注押在了美术事业上。

辞职后，他虽在福岡国际学校和画室授课，也创作过颇具市场前景的清澈水滴画作，但“生活费主要靠妻子支撑”才是现实。在这样的境遇中，他始终追寻着色彩与构图之美。从 1981 年首届现代日本美术展起，他频繁参与各类竞赛、群展，更举办个展，创作了大量作品。

与素材融为一体

某个时期，九州派的标志性特征是运用煤焦油和沥青创造的“黑色”。率先使用煤焦油的是石桥。面对新材料时，期待与不安并存，但“能真切感受到自己正挣脱陈规进行创作”正是其魅力所在。继九州派之后，艺术家们更将油漆、清漆乃至草席等随手可得的物品转化为画材——帆布、胶合板、焚烧叠压的报纸、吐司面包……

1963 年在八幡美术馆举办的“九州·向可能性进发”展中，他曾将实物沥青铺路碎片着色后排列成道路。如今他还在用熨斗烧制毛毡。“我试图发挥材料本身的强度，与之融为一体，这与九州派时期并无二致。”他如是说。

去年，他与韩国抽象画家崔明永在首尔举办了双人展。“那股劲头就像当年闯进东京时一样啊”，他笑着说。

过去十余年专注于“白色平面空间”创作的他，今年个展中推出了“黑色平面空间”。试图以原始的“白”与终极的“黑”构建独特的东方空间。“还想创造出如绘卷或卷轴书信般的抽象世界呢”。这位秉持九州派精神生活的男子，意气风发。

九州派から四半世紀

開争心かきたてられ 卒業後間もない二十七年から 左隣国に引きつけようとする

[illegible][illegible]

九州派の歴史は闇の連続に反対する夫人を「男がいつのパンフレット

泰幸 (58)

いつもは物静かな「タイコさん」だが、九州派の話になると闘志をむき出しにする。他のメンバーと違っている。他のメンバーを口にしなくて困るから、よくいって迫力がある。日韓現代美術展で九州派が生まれる前、高校

[illegible]

その延長が、今年で八回目を
知えた白鶴代美翁が八回と
言つた九州旅の仲山、山
内閣と飯沼藩市とをとり第
一回から参加しており、西
洋には遠く東洋の國を
探検するのが、余世の目
ケシを上げさせたのはラ
イバルの存在ではなかつた
か、そのゝ、藥畑はルレ
ジャーナリズムで中央と終
彩色や構成の
た、きれいな
なりきりする
は左側に模写
が美である、
その、現代代
た、昭和十六
十六年）など

「九州派の気持ちで、独自の東洋的空間を
探る」と語る石橋泰幸氏

〈福岡市〉

ルグループ展に出品したり、個展を開いておびただしい作品を作った。

また、その「ナチス」の「ドマー」は、コルターールや「アスファルト」を「黒」に用いたのが「黒」である、新しい素材と向き合う時には、期待と同時に不安があるが、

「マンネリから選んで作って、込んだ時と同じ感覚をみた
いるという実感がある」のが「たね」と笑う。

この十数年「白の平面空間」

ペンキやラッカー、むしろと取り組んできたが、今年の

など手当たり次第に圖にしようとした九州系も、カンバス、發表した、原始的な「白と

ベニヤ板、燃やしたり重ねた 最後の色「黒」とで、独自の

りした新聞紙、食パン……東洋的な空間を作ろうとす

九州・可能性への懸念」展 奇一繪巻や巻紙の種々の

は実物のアスファルト舗装のね・九州派の気分で生きろ

断りに碧色して道路に並べた 男は意気盛んだ。 二 鼓吹略二

(吉田浩記著)

今は一ハルトを三テで焼く
 土事としてゐる。『薪材の寺
 九州旅襲
 10月10日まで

つ獲を生かし、自分と一体 福岡市中央区大濠公園、福岡

にしようとしているが、それ 市美術館、日曜休館。